

月の花挽歌 ～9. ^{にちにち} 日日平安～

9-3

パリの有名花店で五年間の修業の後、帰国して、銀座の中心部に『フラワーベッド』をオープンさせた令子の現在の年齢は四十代後半になるが、バックグラウンドは謎めいていて、真紀でさえ知らないことが多かった。

令子は、シャンソン『恋心』について口を挟んだきりで、映画人ならではの行き交う会話の端々を、シャンパンを上品な振る舞いで飲みながら楽しそうに耳を傾けていた。

「Kさんのデビュー当時の大船撮影所って、木造の西洋館が散在するモダンでお洒落な雰囲気醸し出していたそうですね？」と令子はおもむろに、鋭敏な感性を持ち合わせていれば察知するであろう、微妙な沈黙の隙間を埋めるでもするかのように尋ねた。

「あら、誰にお聞きになったの？そう、そうなの。今でも目の前に浮かんでくるわ！特に春になると桜並木が見事なトンネルを作り、所内の誰もがお花見気分であふれていたわ。並木通りの右側には女優館、左側には男優館があって、活気にあふれていたわ。何と言ってもその頃は映画の全盛期でしたもの……」とKは目を細めて、潤いを含んだ声で言った。

「少し話が逸れますが、黒澤さんの画コンテ（絵コンテ）を生で見せてもらったことがあります。確か、『影武者』、『夢』、『八月の狂詩曲』などでしたが、水彩絵の具やクレヨンで描かれた画コンテに感銘を受けました」と令子は好い加減でスパイスの利いたこぼれ話を付け加えた。

「誰に見せてもらったんですか？」とTはチョット驚いて訊いた。

「よくご存じかと思いますが、野上照代さんです」

「野上さんですか、なるほど一、納得、納得です。……親しいんですね」とTは、改めて令子をまじまじと見つめて言った。

「はい。今でも、いい距離間でお付き合いをさせていただいております」

「横田君、今の話聞きました……」とTは言って、またもや画家に不意打ちをする。

「黒澤さんの画コンテのことですか？」と横田は不快の表情を押し隠すようにして、なんとか声を整えて言った。

「Kさん、大船撮影所は、今、どうなっているのですか？」と令子はスムーズにシフトチェンジして怪しい雲行きに助け舟を出した。

「撮影所は、丁度2000年に閉鎖したので、今年で六年目になるかしら。今、跡地は鎌倉女子大学になっているわ……。これも何かのご縁でしょうから、今度のTさんの『人情紙風船』に夢と希望を託しましょうよ。キャスト以外でも私に協力できることがあれば、おっしゃって。ねえ、皆さんもよ！」とKは語気を強めて同席者に呼びかけた。